

アイデア論生成の2つの論理 ——「相反する現われ」と「多の上に立つ」

浅野幸治

1、序論

本論文は、『国家』篇を中心としたプラトン中期の対話篇に現われるアイデア論に関わる。これは古典的アイデア論とも呼ばれ、その顕著な特徴は、アイデアと個物の関係を個物とその似像の関係に準えて理解しようとする点にある（『国家』篇476c2-7, 509d6-510b1）。そのようなアイデアを要請する議論としてプラトンには2つの主要な議論、即ち相反する現われからの議論（Argument from Conflicting Appearances）⁽¹⁾と多の上に立つ—という議論（One over Many Argument）⁽²⁾とがある。しかし、もし相反する現われからの議論も多の上に立つ—という議論もどちらも同じアイデアの存在を主張するものであるならば、何故2つの議論があるのだろうか。2つの議論を同一の議論だと考える人はいないであろう。それでは相反する現われからの議論と多の上に立つ—という議論とは、相互に含意し合うという意味で相等しい議論であろうか。私はそうではないと考える。もし相等しいのではないとしたら、2つの議論はどのように異なりまたお互いにどのように関係するのだろうか。このことを見極めることが、本論文の目標である。私の考えでは、プラトンのアイデア論とは決して一枚岩な理論ではなく、そこにはいくつかの思考の流れが含まれており⁽³⁾、思考の流れは議論となって表れるので、そういった思考の流れ（議論）を注意深く区別することが重要である。また、アイデアとは議論によって要請される理論的对象であるので、アイデアの本性を理解するためには、アイデアがいかなる議論によっていかに要請されているかを知ることが不可欠である。

相反する現われからの議論と多の上に立つ—という議論とがどのように異なりまたお互いにどのように関係するのを見極めるためには、それぞれの議論が正確に

どういう論理であるのかを見定めることが準備作業として必要であるので、本論文でもまずはそれぞれの議論の解釈を行う。第2節では相反する現われからの議論についてホワイトの解釈を紹介し、第3節では多の上に立つ—という議論についてファインの解釈を検討しながら、それぞれの議論が正確にどういう前提からどういう結論を導き出す議論であるのかを明らかにする。そして第4節では、相反する現われからの議論と多の上に立つ—という議論とが相互に独立であることを示し、プラトンのアイデアの生成には相反する現われからの議論と多の上に立つ—という議論の両方が必要でありどちらか一方の議論だけではアイデアならざるものが生み出されることを論じる。本論文はアイデア論生成の論理の解剖といった性格を持つが、そういった解剖によって一体何が見えてくるようになるのか。既に述べたようにアイデア論にはいくつかの思考の流れが含まれているが、そういった思考の流れが独立であることの内に孕まれたアイデア論の可能性が見えてくる。そのような可能性として、第5節では、私の解釈に従えば数学的中間物の説をプラトンのアイデア論の中に位置付けることができることを指摘して本論文の締めくくりとする。

2、相反する現われからの議論

この節では、ホワイトの解釈を、相反する現われからの議論の論理を正確に捉えた概ね正しい解釈として紹介し、ホワイトの解釈に沿って相反する現われからの議論の前提と結論を正確にまとめる。

まず初めに相反する現われからの議論を、その主要テキストと思われる『国家』篇第7巻の箇所から引用しておく。

同じものが感覚の上では大きくてまた小さい……。このような場合においては、魂はこんどは必然的に、困惑に追いこまれざるをえないことにならないか——いまこの感覚が大きいと合図しているものは、それが同じものを小さいとも告げているとすると、いったい何なのか、とね。……そこで、何かこのような状況のなかから、はじめてわれわれに問の発動が起るのではないだろうか——それならばこの<大>とは、また<小>と

は、そもそも何であるのか、と。(4) (『国家』篇第7巻524a3-c11)

ここで述べられる「大きい」「小さい」といった言葉は、実は「指」のような言葉と区別されている。そこで相反する現われからの議論の解釈の要点は、「大きい」「小さい」といった言葉と「指」のような言葉との区別が何を意味するのか、ということにある。プラトンに倣って、中指と薬指と小指を例として見てみる。中指も薬指も小指もすべて等しく指と見え、反対のものとも見えることがないので、視覚はそれぞれの指が指であるという観察に関して十全である。ところが、薬指は大きいとも小さいとも見える。つまり同一のものに関して大きくかつ小さいと2つの正反対の性質が観察されるので、視覚はこの点で不十分であり、〈大〉とは何か、〈小〉とは何かを探求すべく知性を助けに呼ぶとされる。

「大きい」「小さい」といった言葉と「指」のような言葉の区別は、しばしばアイデアの範囲を「大きい」「小さい」のような関係語・形容詞に限定し「指」のような実体語・名詞にはアイデアの存在を否定するものと解釈されるが(5)、そうではない。『国家』篇第6巻の線分の比喩や第7巻の洞窟の比喩では動物や植物の名前に対応するアイデアが認められているように思われるし、第10巻では寝椅子や机のアイデアが言及されているからである。また「大きい」「小さい」は正反対の性質であり、魂を困惑させるのはこういった正反対の性質であるとしばしば解釈されるが(6)、プラトンは、FでないこととFの反対であることとの区別には関心がない。例えば『国家』篇第5巻の相反する現われからの議論において、プラトンは「醜い」という言い方から「美しくない」という言い方へと自由に表現を変えている(『国家』篇479a5-b10)。従って「Fの反対である」という言い方をする時にプラトンが実際に問題にしているのは「Fでない」ということである。

さてホワイトによれば、知覚の対象にプラトンが見出す問題点は、Fであるものがすべてまた非Fでもあることである(7)。そして、知覚対象が相反する現われを示す理由は、ある種の語が関係語だからではなく、知覚的判断の相対性にある。即ち、あるものがFであるという判断が許容されるか否かは、その判断がなされる特

定のパースペクティブに依存する⁽⁸⁾。知覚的判断のパースペクティブには、判断する人が知覚対象を見る角度、比較の対象、判断する人の関心、時間などの要因が含まれる⁽⁹⁾。時間の要因はプラトンの場合、特に重要である⁽¹⁰⁾。例えば、『国家』篇第5巻にある相反する現われからの議論では、知覚される美しいものはすべてやがて美しくなく現われる時が訪れるだろうと述べられている（『国家』篇479a5-7）⁽¹¹⁾。

相反する現われからの議論が指摘する知覚対象の相反する現われ（Fかつ非F）はある種の語が関係語であることに依るのではないので、アイデアの範囲は関係語に限定されない。むしろ、なにかがFであるという知覚的判断はFが形容詞の場合でも名詞の場合でも判断がなされるパースペクティブに依存するので、相反する現われからの議論は形容詞にも名詞にも妥当する。

ホワイトによれば、『国家』篇第7巻において相反する現われからの議論が認めている「大きい」のような形容詞と「指」のような名詞の区別は、特に初心者にとって、魂を知性の働きへと最も導きやすい述語とそれほどではない述語の区別に過ぎず、それほどではない述語には対応するアイデアが存在しないという意味ではない⁽¹²⁾。『国家』篇第7巻の相反する現われからの議論が形容詞と名詞とを区別する目的は、Fとも非Fとも現われるようなものとそのような相反する現われを示し得ないものとを区別することであり、実際には見られるものと知られるものの中にプラトンが認める区別を指し示しているに過ぎない（『国家』篇524c13）。

そうであるとすれば、相反する現われからの議論の前提（a）および結論（b）は以下のようなものであるとすることができる。

（a） Fと現われる知覚対象は、非Fとも現われる。

（b） 非Fとは現われ得ないようなFそのものが存在する。

このような相反する現われからの議論を衝き動かしている動機について考えてみる時、プラトンは私達の周りの目で見られる対象に深く失望しており、Fとも非Fとも現われるような不確実な仕方でFであるものではなく真にFであるものを特に

学問的認識の対象として要求するのだと考えられる。

3、多の上に立つ—という議論

この節では、まず多の上に立つ—という議論のファインによる再構成を紹介し、次いでファインの再構成に必要な修正を加える。まず最初に多の上に立つ—という議論を、その主要テキストと思われる『国家』篇第10巻の箇所から引用しておく。

というのは、われわれは、われわれが同じ名前を適用するような多くのものを1まとめにして、その1組ごとにそれぞれ1つの<アイデア>というものを立てることにしているはずだから。（『国家』篇第10巻596a6-7）

この箇所を解釈するに際して、ファインはまずアリストテレスの伝える多の上に立つ—という議論を検討し、それに2種類を区別し一方を単に「多の上に立つ—という議論（OMA）」と呼びもう一方を「厳密な多の上に立つ—という議論（Accurate-OMA）」と呼ぶ⁽¹³⁾。ファインによれば、多の上に立つ—という議論（OMA）は、以下の2つの前提から成り立つ。

（1）多くの個物がすべてFである場合、それらの個物についてある1つのものFが述語として述べられる。（一義性の仮定）

（2）Fは、Fであるいかなる個物とも同じではない⁽¹⁴⁾。（非同一性の仮定）

ファインによれば（1）と（2）から、『国家』篇第10巻の多の上に立つ—という議論は次の結論を推論する⁽¹⁵⁾。

（3）内在アイデアFが存在する。

ファインのこの解釈の特徴は、（2）の非同一性の仮定からはアイデアの離在性が出てこないことを根拠に、『国家』篇第10巻において多の上に立つ—という議論の要請するFが内在アイデアだとする点にある。これは興味深い点であるが、ファインのこの解釈にそのまま同意することはできない。確かに（1）と（2）からはイデ

アの離在は帰結しない。しかしこのことはむしろ、(1)と(2)がプラトンの多の上に立つ一という議論の解釈としては正しくないことを指し示している。

ところでファインによれば、厳密な多の上に立つ一という議論 (Accurate-OMA) は、(1)と(2)とは少し異なる以下のような前提を持つ。

(1a) 多くのものがFである場合にはいつでも、それらについて1つのものFが述語として述べられる。

(2a) Fは、Fであるいかなるものとも離れてある⁽¹⁶⁾。

まず(1a)と(2a)は、Fであるとされるものが個物に限定されないという点で(1)や(2)と異なる。また議論によって要請されるFについて、(2)はFである個物とは異なっていると主張するだけであるのに対して、(2a)はFであるものとは離れてあると主張する⁽¹⁷⁾。従って(1a)と(2a)からは次の(3a)が帰結する。

(3a) Fであるいかなるものとも独立に、Fが存在する。

かくして、多の上に立つ一という議論 (OMA) と厳密な多の上に立つ一という議論 (Accurate-OMA) の主要な違いは、厳密な多の上に立つ一という議論 (Accurate-OMA) が要請するFは離在するが多の上に立つ一という議論 (OMA) が要請するFは離在しないという点である⁽¹⁸⁾。

多の上に立つ一という議論 (OMA) と厳密な多の上に立つ一という議論 (Accurate-OMA) のもう一つの違いは、厳密な多の上に立つ一という議論 (Accurate-OMA) は『パルメニデス』 (132a2-b2) で述べられる第三人間論に陥るが多の上に立つ一という議論 (OMA) は陥らないという点である⁽¹⁹⁾。厳密な多の上に立つ一という議論 (Accurate-OMA) は、その都度Fであるとされたものとは別に新しいFが存在することを求めことによって繰り返し新しいFを生み出していくが、多の上に立つ一という議論 (OMA) の(1)と(2)はFであるとされるものを個物に限定するので、Fであるとされるものが無限に膨れ上がっていかないからである。この第三人間論の標的となっている『パルメニデス』の中の多の

上に立つ一という議論は、『国家』篇第10巻の多の上に立つ一という議論と何ら異なるとは思われない。従って私は、(1)と(2)から(3)を推論する多の上に立つ一という議論(OMA)ではなく、(1a)と(2a)から(3a)を推論する厳密な多の上に立つ一という議論(Accurate-OMA)こそがプラトンの多の上に立つ一という議論を正しく再構成したものであると考える。

では何故プラトンは、多の上に立つ一という議論を考えるのか。固有名詞の場合に明らかなように、ある名前と呼ばれるものが1つだけである場合には、その対象がその名前と呼ばれることを説明しようという要求は生じない。しかし多くのものがFと呼ばれる場合には、それらが同じ意味でFであることをプラトンは何か1つの共通の原因・起源に遡ることによって説明するのだと考えられる。

4、二つの議論の相違

この節では、相反する現われからの議論と多の上に立つ一という議論とが相互に独立の議論であること、即ちどちらの議論の結論ももう一方の議論の前提からは帰結しないことを論じる。確かに、プラトン自身しばしば相反する現われからの議論と多の上に立つ一という議論を併用するし、特に『国家』篇第5巻から第6巻におけるプラトンの形而上学においては2つの議論は不可分一体となっているように思われる。しかし、相反する現われからの議論と多の上に立つ一という議論の前提は全く異なっているし、その結論もまた異なっている。従って、相反する現われからの議論と多の上に立つ一という議論とがFとされる同じ多くの個物に適用された場合にも、それぞれの議論が要請する対象の特徴は非常に異なっている。また、相反する現われからの議論と多の上に立つ一という議論とは必ずしもお互いを必要としない、言い換えればどちらかの議論だけを用いてもう一方の議論を用いないことが可能である⁽²⁰⁾。

まず第1に、世界の中にFとも現われ非Fとも現われる、例えば三角形に見えまた三角形でないように見える知覚対象が唯1つだけあるとしてみよう。このよう

な対象に対して相反する現われからの議論は妥当するであろうか。私は妥当すると考える。というのは、その同じ対象が感覚によれば三角形でないとも見えるのだから、三角形とは何かに関して我々の魂を困惑させるには、三角形の対象1つで十分だからである⁽²¹⁾。しかし第2に、相反する現われからの議論は、Fそのものが唯1つであるかどうかとは無関係である。相反する現われからの議論が要請する対象Fを定義している特徴は、非Fとは現われえないことであり、Fのこの特徴を充たす対象がもし複数個あった場合には、それらの対象はすべて、相反する現われによって魂を困惑させることがないので、Fの意味として満足のいくものである。

第3に、多の上に立つ一という議論が要請するFは、Fであるとされるものとは離れてあるけれども、完全である必要はない。プラトンは、多の上に立つ一という議論に関してアイデアと個物の間に成り立つのと同様の関係が個物とその似像の間にも成り立つと考える。つまり多の上に立つ一という議論は、多くの個物から1つのアイデアを推論する場合にも用いられるが、多くの似像から1つの個物を推論する場合にも妥当する。両方の場合に共通な論理は、多くのものがFである時、それらがすべて同じ意味でFであることを、それらの原物として1つのFを仮定することによって説明することである。そこで例えば、多くの彫像がすべて同じ意味でクリントンと呼ばれるとしよう。これらのクリントン像に適用された場合、多の上に立つ一という議論は、クリントン像が存在しなくても存在できる一人の人物即ちクリントンその人の存在を主張する。しかし今クリントンと見えている対象も50年後にはそう見えないだろうから⁽²²⁾、クリントンは、クリントンでないとは現われえないという意味で完全なわけではない。第4に、多の上に立つ一という議論が当てはまる多くのFであるものがもし非Fと現われえない場合、そのことによって多の上に立つ一という議論は妥当しなくなるであろうか。依然として妥当する。少し上で見たように、相反する現われからの議論が要請する、Fを定義する特徴を充たす完全な対象は複数でありえる。そういった完全な対象が我々の周りにある個物でないことは確かであろう。しかるに、多の上に立つ一という議論は多くのFであるもの

に妥当し、これらの多くのFであるものは個物に限定されない。従って、多の上に立つ一という議論は、多くの完全な対象がFであるという事からそれらすべてについて述語として述べられる1つのFを要請することができる。

こうして、相反する現われからの議論は妥当するが多の上に立つ一という議論は妥当しない場合も、また多の上に立つ一という議論は妥当するが相反する現われからの議論は妥当しない場合も考えることが可能である。三角形のように見え三角形でないようにも見えるような知覚対象が1つしかない場合には、相反する現われからの議論は適用できるが多の上に立つ一という議論は適用できない。Fであり決して非Fとは現われない完全な対象が多数存在する場合には、多の上に立つ一という議論は適用できるが相反する現われからの議論は適用できない。従って、相反する現われからの議論と多の上に立つ一という議論とは論理的に独立の議論である。

少し上で述べたように、相反する現われからの議論と多の上に立つ一という議論が要請する対象の特徴は、異なっている。相反する現われからの議論が要請する対象の特徴は完全性（Fであって決して非Fではない）であるのに対し、多の上に立つ一という議論が要請する対象の特徴は一性と離在性である。プラトンのアイデアがこれら両方の特徴を有するためには、相反する現われからの議論と多の上に立つ一という議論と両方の議論が必要である。即ち、2つの議論が同じ多くのFである知覚対象に同時に適用された場合、要請されるFが有する完全性は相反する現われからの議論から、一性と離在性は多の上に立つ一という議論から得られる。『国家』篇第5巻および第6巻では、相反する現われからの議論と多の上に立つ一という議論とが不可分一体になっているので、Fそのものは一であり完全であり離在しているが、これが我々が通常「アイデア」という言葉で理解するものである。しかし、相反する現われからの議論と多の上に立つ一という議論のどちらか一方だけが働き、もう1つの議論が欠ける場合には、要請されるFはFのアイデアとは何か異なったものである。

5、数学的中間物

以上では、プラトンのイデア論の内に相反する現われからの議論と多の上に立つ一という議論の2つの思考の流れがありそれらが相互に独立であることを見てきた。もし2つの議論が独立であれば、当然一方の議論を使いもう一方の議論は使わない可能性がイデア論の必然的構成要素としてある。

この節では、そのような可能性として数学的中間物の思想をプラトンのイデア論の中に位置付けることを試みる。我々にとって特に注目されるのは、三角形と見え三角形でないとも見えるような知覚対象に多の上に立つ一という議論ではなく相反する現われからの議論だけが適用される場合である。この場合、相反する現われからの議論は、三角形であり、三角形でないとは決して現われないような多くの対象を要請する。こういった三角形は完全でパースペクティブから独立であり、「永遠不変に同一のあり方を保つ」（『国家』篇479a2-3）。このような対象は、もし相反する現われからの議論と多の上に立つ一という議論とが独立だという私の主張が正しければ、プラトン哲学の当然の帰結であろう。私の主張の裏付けとして以下に述べる2点は、どちらも数学の対象に関わるが、第1はアリストテレスの報告であり第2は『国家』篇第7巻における相反する現われからの議論の文脈である。

第1に、アリストテレスは『形而上学』（987b14-18）の中でプラトンは「感覚的事物とイデアとのほかに、これら両者の中間に、数学の対象たる事物が存在すると主張した」（²³）と伝えているが、そこでのアリストテレスの説明によれば、数学的中間物は永遠的・不変不動的である点で感覚的事物と異なり（言い換えれば、イデアと同じであり）、複数個存在する点でイデアと異なる。では、そもそも何故数学的对象の存在を主張する必要があると考えられるのか。

確かに、目に見える三角形は不完全である。目に見える三角形は、例えば紙上の黒鉛の粉やインクの染みであり、物質的存在である以上いつかは消滅する。しかしピュタゴラスの定理は、目に見える三角形がすべて無くなったとしても依然として真である。従って、完全な三角形が存在する。ところが、三角形のイデアは1つだ

けであるのに数学の命題には複数の三角形を必要とするものがあるので、三角形のアイデアは数学の命題にはなじまないと思われる。例えば、1つの直角二等辺三角形Aは2つの相等しい直角二等辺三角形BとCに分割される。この命題は、三角形が3つあるのでなければ意味をなさないであろう。従って、数学の対象はアイデアとは異なるものである。

アリストテレスは更に、「数学的数が比較可能的（加算可能的）である」というプラトン主義者の説に言及して、「数学的数においては、そのうちのいずれの単位も他の単位と異なっていない」と述べている（『形而上学』1080a22-3）。この報告によれば、すべての数学的数は質的に同一の単位から構成されており、その故に加減乗除が可能である。これは、1のアイデアや2のアイデアとは異なる数学的1や数学的2が多数存在することを意味する。

第2に、『国家』篇第7巻で示された将来の哲学者のための教育課程の中でプラトンは、数学を哲学から区別し哲学への準備教育として位置付けている。準備教育としての数学の主要な役割は、学生の魂を生成から存在へと向け変えることにあつた。相反する現われからの議論は、数学がどのようにして学生の魂を生成から存在へと向け変えるかを説明するという文脈の中で提示されている。このことは、数学の対象がアイデアと同様に存在であることを示している。けれどもプラトンは、例えば数学で扱う数について次のように述べている⁽²⁴⁾。

その中の1はあなた方の要請するような性格のものであつて、そのひとつひとつは、どれをとつても互いにまったく等しくて少しの差異もなく、それ自身の内に何ひとつ部分というものをもたないとされている。（『国家』篇526a2-4）

これは、数学的数は不可分で質的に同一の単位から構成されているという意味であり、数学的1や数学的2が複数個存在することを示している。もしそれぞれの数学的アイデアに対応して数学的对象が複数個存在するのであれば、数学的对象と数学的アイデアとは別々の対象であり数学と哲学は別々の学問であろう。このこともまた、

相反する現われからの議論と多の上に立つ—という議論とが独立であるという私の主張から理解することができる。従って私の主張には、アリストテレスによる数学的对象に関するプラトン説の報告ならびに数学的単位の本性についてのプラトン自身の言葉の両方を理解させてくれるという利点がある。

(註)

- (1) 『パイドン』 74b7-c6および『国家』 篇479a5-c5, 523b9-524c12を参照。
- (2) 『国家』 篇475e9-476a8, 507b2-8, 596a6-7および『パルメニデス』 132a2-4を参照。
- (3) プラトンの思想に複数の思考の流れがあることは、古くから知られている。例えばアリストテレスは、プラトンに影響を与えた者としてクラテュロスとソクラテスとピタゴラス学派を挙げている（『形而上学』 第1巻第6節987a29-987b14）。
- (4) 『国家』 篇からの引用の翻訳は、岩波文庫の藤沢令夫訳を参考にし、必要に応じて若干の変更を加えた。
- (5) そのような解釈としては、Owen 1957を参照。
- (6) Cf. Allen 1961: 168.
- (7) White 1992: 284 and 307, note 21.
- (8) White 1989: 51-2; and 1992: 289-90. 知覚的判断が「許容できる (acceptable)」とか「許容できない」とかいうのは、ホワイト独特の用語である。知覚対象は、Fであるとも非FであるともFかつ非FであるともFでも非Fでもないとも言えないので（『国家』 篇479c3-5）、知覚対象はそもそも「Fである」とか「Fでない」とかが言われうる対象ではない（1992: 296）。そういう理由でホワイトは、知覚的判断について「真である」とか「偽である」という表現を避けて「許容できる」とか「許容できない」という言い方をするのだと思われる。
- (9) 『饗宴』 211a2-5は、ある知覚対象がFであるという判断の依存するパースペクティブとして、ある点で（視点）、ある時に（時間）、あるものとの関係において（比較）、ある所で（場所）、ある人にとって（判断者）という5つの要因に言及している。
- (10) プラトンは、『パイドン』 70d-71d, 78d-79a, 79c, 80bや『国家』 篇第5巻～第7巻476c2-8, 485b2-3, 527bや『饗宴』 206-8のような中期対話編において現象界の不安定性（はかなさ）に大きな関心を示している（Cf. White 1989: 57-8; and 1992: 288）。
- (11) 知覚される美しいものは、永遠不変に同一のあり方を保つ美そのものと対比されて

いる（『国家』篇479a1-3）。但しここで「永遠」とは時間上の永続性というよりも非時間的な永遠性のことをいう。

- (12) White 1992: 282 and 305, note 6. プラトンは、次のように述べている。

多くの人々（大衆）の魂は、指とはそもそも何であるかという問を、知性に向かつて問いかけざるをえなくなるようなことはない。（『国家』篇523d3-5）

何かこのような状況のなかから、はじめてわれわれに問の発動が起るのではないだろうか——それならばこの〈大〉とは、また〈小〉とは、そもそも何であるのか、と。（『国家』篇524c10-11）

このプラトンの言葉は、相反する現われからの議論がここで認めている区別は多くの人々にとっての区別、哲学教育の初期段階での区別に過ぎないことを示している。

- (13) Fine 1982. アリストテレスの多の上に立つ—という議論は、『形而上学』第1巻9節についてのアレクサンドロスの注釈の中に保存されている。
- (14) Fine 1982: 159; and 1980: 200. 第3番目の前提（永続性の仮定）は、プラトンと直接には関係ないので省略した。
- (15) Fine 1980: 236-40.
- (16) Fine 1982: 162.
- (17) Fine: 1982: 163-4.
- (18) Cf. Fine 1982: 165.
- (19) Fine 1982: 166-9.
- (20) 相反する現われからの議論と多の上に立つ—という議論が相互に独立だからである。
- (21) 『パイドン』で論じられる想起との関連で言えば、Fであるものを唯一つ経験しただけでもFのアイデアを想起するのに十分でありえるし、Fである知覚対象が一つしかない場合その相反する現われ（Fかつ非F）だけで、知覚されるFとFそのものが完全に別々であることを我々が理解するのに十分であろう。
- (22) ここで我々が、人格の同一性についての形而上学的な問題に立ち入る必要はない。私の議論にとって必要なことは、クリントンの身体はなんらかの意味でクリントン像がクリントンと呼ばれることの原因であるが、それが今から50年後にはクリントンとは見えないであろうという点だけである。
- (23) アリストテレス『形而上学』の翻訳は、岩波文庫の出隆訳を参考にし、必要に応じ

て若干の変更を加えた。

- (24) 次の引用箇所而言及される対象が数学的数であり、その数学的数を導入する議論が相反する現われからの議論であることについては、Annasを参照。但しアンナスは、プラトンの数学的中間物を要請する議論をアイデアを要請する議論との関連において見ていない。従って「多の上に立つ一」という議論がアンナスの視野には入っていない。

参考文献

- 浅野幸治、[1995A]、「プラトンのアイデア論の不完全述語解釈その後——中畑とホワイト」、阪南大学学会『阪南論集 人文・自然科学編』第31巻第1号、1995年6月、一～十一頁。
- 、[1995B]、「プラトン『国家』篇における数学の対象」、東北大学哲学研究会『思索』第28号、103～125頁。
- 、[1996]、「Two Arguments for Forms: Conflicting Appearances and One over Many」、阪南大学学会『阪南論集 人文・自然科学編』第32巻第1号、1996年6月、79～96頁。
- 中畑正志、「相反する現われ——アイデア論生成へのプラトンの1視点」、森・中畑の81～100頁に所収。
- 森俊洋・中畑正志編、『プラトンの探究』、九州大学出版会、1993年。
- Allen, R. E. [1961]. "The Argument from Opposites in Republic." *Review of Metaphysics* 15: 325-35. Reprinted in Anton & Kustas: 165-75. (Cited in the latter pagination.)
- , ed. [1965]. *Studies in Plato's Metaphysics*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Annas, Julia. "On the 'Intermediates'." *Archiv für Geschichte der Philosophie* 57 (1975): 146-66.
- Anton, J. P. and Kustas, G. L. ed. *Essays in Ancient Greek Philosophy*, Vol. I. Albany, NY: State University of New York Press, 1971.
- Fine, Gail. [1980]. "The One over Many." *Philosophical Review* 89: 197-240.
- . [1982]. "Aristotle and the More Accurate Arguments." In Schofield & Nussbaum: 155-77.
- Kraut, Richard, ed. *The Cambridge Companion to Plato*. Cambridge: Cambridge University Press, 1992.
- Owen, G. E. L. [1957]. "A Proof in the *Peri Ideōn*." *Journal of Hellenic Studies* 77: 103-11. Reprinted in Allen 1965: 293-312; and Owen 1986: 165-79. (Cited in the last pagination.)
- . [1986]. *Logic, Science and Dialectic*. Ithaca: Cornell University Press.

Penner, T. and Kraut, R. ed. *Nature, Knowledge, and Virtue: Essays in Memory of Joan Kung*. Edmonton, Alberta: Academic Printing and Publishing, 1989.

Schofield, M. and Nussbaum, M. ed. *Language and Logos: Studies in Ancient Greek Philosophy Presented to G. E. L. Owen*. Cambridge: Cambridge University Press, 1982.

White, Nicholas P. [1989]. "Perceptual and Objective Properties in Plato." In Penner & Kraut: 45-65.

———. [1992]. "Plato's Metaphysical Epistemology." In Kraut: 277-310.

[付記]

本論文は、日本西洋古典学会第47回大会（1996年6月、大阪学院大学）において発表したもので、「Two Arguments for Forms: Conflicting Appearances and One over Many」を約半分に圧縮した日本語版である。

（神戸学院大学・阪南大学・英知大学非常勤講師）

（付記 本論文は、神戸大学哲学懇話会『愛知』第14号（1997年）、111～124頁で発表したものである。）